

備陽史探訪

第88号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL. (0849) 53-6157

ある神宮寺の歴史を探る

―八幡山宝寿院の場合―

出内博都

大陸文化（技術・思想・宗教）が組織的・公的に流入して行く古墳時代以降、それは古代国家の形成や政治機構の仕組みと深く関わってきた。とくに仏教は、当時は民族独自の氏神を精神的中核とした氏族社会であつただけに、その受容には種々のトラブルがあつたと想像される。

すなわち、新しく受け入れた仏法において、あくまでも在来の氏神崇敬と同じように氏族の安寧・幸福を守るものでなくてはならなかつた。しかし仏法は必ずしも氏族に限定されないもつと普遍的な宗教である。ことに氏族社会から統一国家へと発展しようとするとき、在来の氏族信仰も国家的性格をもつ必要がある。

こうした歴史的要請が西暦五八七年の蘇我・物部の戦いであり、聖徳太子の仏教政治（篤く三宝を敬へ。三宝は仏法僧なり。則ち四生の終帰、

万国の極宗なり。何の世、何の人は是の法を貴ばざる）である。

こうして正式に受容された仏教は、奈良時代になつて国家が中央集権的に統一されたように、東大寺を中心に国ごとに国分寺を建て、仏法の尊崇と国の政治が一致した形になつた。こうした中から古来の神々をもつて仏法守護の神と説き、神々は仏法の功力によつて救われるというようになった。ここに「神仏習合」の考え、やがて「本地垂迹説」が生まれてきた。これらの思想を形に表わしたものの一つに「神宮寺」がある。

本地垂迹説は仏・菩薩が人々を救うために様々な神の姿をかりて現れるという教説である。日本では東大寺の大仏建立を発願した聖武天皇が、橘諸兄を伊勢神宮に遣わしてその成就を祈らせたところ「日輪は大日如来也、本地は盧舍那仏也」という夢告を受けたと記しているが、この教説は平安時代中期以降一般に広まる。仏教伝来後、神は衆生と同じく煩惱に沈んでおり、仏の力で救われる

という教えが広まり、神は仏になるための修業の過程にあるものと説明された。こうしたことから全国に多くの神宮寺が建てられた。また延暦二年（七八三）八幡神に大菩薩の号が奉られた。八幡神の本地仏は阿彌陀仏、天照大神は大日如来または救世観音などとされ、多くの神社は本地仏・菩薩を決めて本地堂を建てた。

しかし、鎌倉時代中期以降、伊勢神宮の神官度会氏によつて神本仏迹神道が説かれた。室町時代に入ると、吉田兼俱の吉田神道によつて神を根本とし、儒・仏を枝葉・花実と説く根葉花実論も出た。いずれにしても、庶民には神も仏も習合した信仰が根付いていった。明治維新後に政府による神仏分離令、廃仏毀釈によつて今日の姿となつたのである。

「神宮寺」

神祇に仕える目的から神社に付属して営まれた寺院。神願寺・神護寺・神供寺・宮寺ともいう。

文献上の初見は「続日本紀」文武天皇二年（六九二）の「多氣大神宮寺を度会郡に遷す」とある。神宮寺建立の背景には、はじめ仏法の力で神が業苦から救われるという思想があつたが、次第に仏法によつて神の威力も増すという思想に変わつていった。宗派的には天台宗・真言宗

に属するものが多い。

千田町の神宮寺については、現在無住でもあり詳しいことは判らない。一般的に神宮寺が地方にまで普及するのは鎌倉期から室町初期とみられるので、その頃であろうが、関連する神社が千田八幡神社なので、これがいつ頃できたかということ関連する問題である。

千田の八幡社は宇山八幡（春日町宇山）を分祀したと伝えられ、現在千田の宇山谷にある「宇山八幡神社」が関係するとみられる。後に惣氏八幡として現在の「千田八幡神社」が建立されたと思われる（その後、再び宇山八幡が再建されたといわれている）。

春日の宇山八幡は坪生庄が分裂したとき、新中八幡社の神宝の狛犬を奉祀したと伝える神社で、元龜三年（一五七二）の棟札があり、戦国時代の歴史現象の一つとすれば、千田の宇山八幡の創祀もほぼこの頃と考えられる。しかし、惣氏八幡（現千田八幡）の建築記録（「藤井家文書」）の一番古いものに「一、八幡社御普請弘治二年庄屋弥左衛門、神主嘉平」という記録があることからみて、千田（惣氏）八幡創建は弘治二年（一五五六）以前とみると、千田宇山八幡の分祀、さらに春日宇山八幡

の創建は、前記(元龜三年)の棟札よりもっと古い時期になる。いずれにしても、十六世紀初頭、中世的郷村(惣村・庄)が崩れて近世的村落が形成される時に村のシンボルとして氏神(鎮守)が祀られたものであろう。

こうした鎮守八幡の創建と神宮寺がどう関わるか、記録や伝承はない。現在、千田の神宮寺を管理されている長尾寺(東深津町)には「寛文年間有山上人が開山し、二代宥勢上人が延宝三年(一六七五)観音堂を建立し、本山観音寺へ帰る」旨の伝承記録がある。

以下住持は、三代宥想、四代清鏡(享保二年四月二十三日)、五代快譽(享保十年十二月二十六日)、六代円浄(明和八年十一月十八日)、七代瑞忍慈周(文政十三年七月七日)、八代泰寿(弘化五年五月十三日)、九代善意(明治十四年九月十一日)、十代良道(明治二十二年三月二十二日、観音寺十六世)と伝わっている。現在境内に残っている五基の無縫塔(住職墓)のうち七代慈周、八代泰寿、九代善意の三基は明瞭に確認できる。中央にある最大の塔は文字不明。右端の一回り小さい塔には「明貞法尼靈、大正五年十一月二日没」とあり、十一代は尼僧であったこと

がわかる(長尾寺の記録には代数の記録はない。便宜上加筆)。

以上五基の無縫塔のうち、左端の「善意上人」の塔の正面に「当山世三世阿闍梨善意」、裏面に「明治十四年九月十一日」沼隈郡松永村之産」とある。「当山三十三世」という場合一世代を何年にみるか、この辺にこの寺の創建を考える一つの鍵があると思われる。前記長尾寺記録の十代で、寛文年間(一六〇〇年代後半)までおよそ二百年間とすると、一世が約二十年になる。この勘定で、「善意塔」の三十三世を考えると、六百年になる。明治十四年(一八八一)から六百年前というと、鎌倉時代中期になり、当時の歴史事情からみて千田における寺院の建立は到底考えられない。まして神宮寺として関連する神社を求めることはさらに不可能である。この三十三世は単なる誇張だろうか。世代数が他の塔にはないのにこの塔にのみあることへの疑問。この塔のみが「阿闍梨」号を記している。何が隠されているのか判らない。寺の立地条件からみると、高い石垣と土堀、背後に墓地と神社をもつ配置、中世城郭型の構え、寛文年間に創建した近世寺院とは考えられないが、結局決め手はない。

八幡社創建を一応弘治頃(藤井家

記録)とすると、記録にある弘治二年が一五五六年で、九代善意の没年明治十四年の一八八一年からみると三二五年の開きがある。住職の一世を十年とみなければならぬ情勢が続いたことも考えられ、さらに一時法灯が絶えて観音寺から入山せざるを得ない状況になったことなどを思うと、一世十年という中に戦国の雰囲気を偲ぶことができるのではないだろうか。近世寺院として在郷町横尾をもつ豊かな近郊農村千田・藪路村を教團として栄えた歴史は、今はなき山門(子供:何かええもんくれえ、親:ええもんは神宮寺へ行け、の俗語を残した)の素晴らしさ。宝篋印塔を始めとする多くの石造物などに偲ぶことができる。

神宮寺と八幡社の関係は「藤井家文書」にある次の文によつてその一面を知ることができる。

天保十三壬寅歳十一月
一、正遷宮寅四月十五日、夜八ツ時(午前一時)相済申候、それより御寺方社人御祈禱御座候而、庄屋并役人不残宮座□、同十六日昼迄○
○、村方小面一日休日いたし□御
□、村中樽入いたし候而賑々舖相
休申候。
一、遷宮之儀二付文化年中修覆仕候節、観音寺より当村神宮寺へ取障

申候ヲ河相保平殿庄屋中ニ而彼是取繕に成候而、神宮寺遷宮之事と相成候処又候、此度修遷二付観音寺より遷宮之処彼是申候得供前文之通河相保平殿より取繕之事申候而掛合仕候□聊後不被申依、右以来遷宮之儀者当邑新宮寺二相極り申候。

(□字読めず、○字そのまま)
本山と末寺の権威の問題か、八幡社の遷宮という大行事はかなり微妙な駆け引きがあつたようであるが、神宮寺が神社の管理について大きな力を持っていたことが窺える。明治の神仏分離政策が徹底したもので、今日のような形になつたことが知られる。

博物館特別展情報

妙法院と三十三間堂

創建以来、法親王が院主となつたあの栄光の妙法院門跡に伝來した文化財と、現在同院が管理する三十三間堂(蓮華王院)に安置される彫刻群によつて、その歴史を明らかにしようとする特別展で、国宝・重文を多数展示、実に見応えがあります。

会場 京都国立博物館
会期 四月六日～五月九日
観覧料 大人一〇〇〇円

(前売り 一〇〇〇円)

生死を分けたものは何

—陰陽五行思想で考える—

門田 幸男

私事で恐縮だが、福山工業の化学科へ五年間一緒に通った級友が一昨年(平成八年)大腸ガンで亡くなった。彼は出世して欧米に出張したりして食事が洋風になっていたからだろう。その点自分は貧乏暮らしの菜食主義者で、大腸ガンとは無縁だと思っていたが、昨年(平成九年)大腸ポリープ(前ガン症状)を切除し、今年(平成十年)は肥大(転移)したリンパ節の切除手術を受けた。

術後の経過も悪く、高熱と激痛に襲われて、地獄の釜にベッドもろとも滑り落ちる幻覚を見るまでになった。何度もやり直し手術をし、三度目に取り付けた腹腔内洗浄パイプの先端があたつたため、腹腔内の動脈破裂を二度も起こすなど散々な目にあつたが、九十九日間の苦闘の末、ようやく退院することができた。退院してから考えたのは、同じ大腸ガンにかかって苦しみ、方や死に至り方や死地を脱することができたのはいったい何がどう違ったからなのだろうというところである。運の善し悪しでは片づけられないほど私にも激痛が襲つたのである。

ここで病気に負けてなくなつたヤマトケルル(ヤマトケルル)のことが思いだされる。天皇に命じられて苦しい遠征に出かける前に姨(母の姉妹)と妻の妹説がある(ある)であるヤマトヒメの所に立ち寄り、火打石の袋(女陰・火処の象徴)を貰って降りかかる火難を凌いだ(火と火はどちらも陽なので相互に反発すると考えられる)。

三輪山の神は猪だったが、伊吹山の山の神は猪になつている。猪を亥と読み替えれば、方位は西北であり、尾張の国のミヤズヒメの所から見れば、伊吹山は西北にあたる。陰陽思想によれば、亥は水気であり、冬の始めの季であるから、当然の成り行きで氷雨を降らせて攻撃してくるわけだ。けれども伊吹山に出かける時は、ヤマトヒメから受けたもう一つの呪物である草薙の剣を持たずに出かけた。だから草薙の剣を逆さに立てて火気の呪力に対抗することができず、山の神の妖気に負けてついに死に至ることになつたのである。

ヤマトヒメは姨とされているが、沖繩の伝説では姉妹が兄弟に対して守護神(オナリ神)となり、その霊力(セジ)を付帯させた(経血を付ける)といわれている。また、手サジ(手拭い)を貰って霊力をつけるという。ミヤズヒメの衣服に経血が付いたという話が突然出てくるといふのも、どうやらこのへんと関係がありそうである。ここで極めつけの首里の鬼の話の一つ。

昔、首里の金城という所に一人の娘がいたが、その兄が人を喰う鬼になつていてという噂がたつた。娘がもしやと思つて兄の留守中に行つてみると鍋に人肉が煮えていた。これは本当だと思ひ、あつうの餅と鉄で作つた餅を持って出かけていき、鬼の前で餅を食べながら女陰を鬼に見せた。鬼が「血を吐くその下の口は何をする口か」と聞くと、妹は「上の口は餅を喰う口、下の口は鬼を喰う口」と答えた。これを聞いて鬼は驚いて崖から転げ落ちて死んだ。

首里の鬼と同じく、人間社会に入り込んできた邪魔者のサルタヒコを撃退するためにアマノウズメは火処を露出した。アマテラスが天の石屋戸に隠れて出て来ない時にも女陰を露わにした。女陰は侵入してくる男根や子種をいったんは受け入れるが、必ず形を変えて押し出す。入れたままでは終わらない。それでアマテラスも女陰の呪力で押し出されたのであり、首里の鬼もはじき出されてしまったのである。(以上吉野裕子著「日本古代呪術」より)

さて、話を元に戻そう。

陰陽思想では、この世は陽である世は陰に分類されることは理解していただけると思う。また、陽と陽、陰と陰はたがいに反発するということもお分かりになるだろう。

私が死の淵をさまよつていたとき、体に陰の気を帯びていたので地獄の入口までたどり着いても、反発されて受け入れられなかったのではないかと私は思っている。私の家内は入院中ずつとつきつきりだったが、既に女としての役目を終え(閉経)火が消え)ているから女房から陽の気を受けなかつたと考えられる。

陰陽思想は現代の科学にも受け継がれていて、電磁気学に生きている。たとえば、この世はプラスの磁場であり、あの世はマイナスの磁場だと仮定すると、マイナスの磁気を帯びていた私がああ世からはじき返されたのだと考えることができる。

私は貧乏な生活が続いたためか無口な性格で、冗談の一つもいえない。陰気な人間と認めざるをえない。結論を先に決め手無理にこじつけているように受け取られるかもしれないが、私が陰陽にこだわる理由がもう一つある。

私は電気科出身ではないので、電気と磁気の間を十分説明できないが、入院中医師に内緒でナショナル

健康器（松下電機製）を持ち込んで朝夕使用した。この機器は以前末期ガンだった母親に使用して末期ガン特有の痛みが現れず、痛み止めの注射をしなくて済んだし、笑顔の最期を看取ることができた。もちろんこの機器の効能だという証拠はない。偶然か神仏のせいか論の分かれるところだが、私の廻りに貢献したといえなくもないと思っている。

隠された真実を追う

種本実

歴史とは勝者の綴ったものだと言われる。真実は教科書の記述のように単純ではない。隠されている事実を知ることが真の「温故知新」ではないだろうか。

○真珠湾攻撃は解説されていたか

某スポーツ新聞の、十二月初旬の紙面に興味深い記事が書いてあった。昭和十六年十二月七日（現地時間）米国海軍は東京発ワシントンの日本大使館あての暗号電報を傍受した。その内容、即ち対米交渉の打ち切り、宣戦布告の最後通牒を解説していた、という内容だった。

人口に膾炙されている通り、太平洋戦争の緒戦、ワシントン時間同日午後一時三十分（日本時間八日午前

三時三十分）に始まった真珠湾攻撃は、「国際法違反」「だまし撃ち」だったと世界から非難された。事実、最後通牒の文書は、ワシントン時間午後二時二十分にハル国務長官に手渡されたのだった。攻撃開始の三十分前に手渡すように指示されていたにもかかわらず…。

本当に、当時米国は日本の暗号を解説して真珠湾攻撃を事前に知っていたのだろうか。沸々として湧いてきたこの疑問を抱き、図書館で先の戦争に関する本を漁った。以下は、「総点検 真珠湾五十年報道 何がどこまでわかったか？」（杉田誠著 森田出版）の要約と読後の感想である。

平成三年（一九九二）の十一月二十八日の日本の朝刊各紙は、アメリカ国防総省の発表として次のような記事を掲載している。アメリカ海軍は、真珠湾奇襲に関する暗号電報は傍受していたものの解説出来ず、真珠湾攻撃の情報は事前につかんでいなかった、という。

この公式発表により、当時のルーズベルト大統領が奇襲を知っていたか否かの問題には、決着がついたとされていた。しかし、アメリカの戦史家、ジョン・トーランド氏は大統領と側近は奇襲を予知していたとの

自説は変わらないと述べている。

真珠湾奇襲五十年の一九九一年には日米両国において、太平洋戦争に関する様々な報道が展開された。その中で、「真珠湾奇襲 ルーズベルトは知っていたか」（今野勉著 読売新聞社）では、具体的な七つの証言をあけて、大統領は知っていたと論じている。

またアメリカの雑誌「ライフ」は、大統領は日本を攻撃する口実を求めて奇襲を取って受けたとの説があるものの、証拠がないと述べている。

そういえば、数年前の某新聞の投書にも、当時ハワイだった日本人の方からの、米軍人から、間もなくハワイが攻撃されるだろうと聞いた旨の証言が載っていた。私は今野氏の本に記されている証言（紙面の都合で紹介できないが）も信頼できるので、奇襲は見抜かれていたと思う。それが史実だとすると、事の重大性から、証明する公式の文書は破棄されているだろう。しかし、当時の軍関係者などの日記や発言を聞いた人々によって、いずれは明らかにするに違いない。あの戦争に関するすべての史実は、何時になったら明らかされるのだろうか。

○忠臣蔵は幕府のヤラセだったか
今年の大河ドラマ「元禄繚乱」、即ち忠臣蔵ほど後世の脚色がなされた「史実」はないのではなからうか。私はこの事件を思うにつけ、なぜ幕府は赤穂浪人の素行を調査しなかったのだろうかと思惑を抱く。調べれば、大石内蔵助達の討ち入りは事前に防げたはずだと思っている。

史家はどうみているのだろうか。童門冬二氏は「新説赤穂事件」において次のように述べている。

「史実」はないのではなからうか。私はこの事件を思うにつけ、なぜ幕府は赤穂浪人の素行を調査しなかったのだろうかと思惑を抱く。調べれば、大石内蔵助達の討ち入りは事前に防げたはずだと思っている。

童門冬二氏は「新説赤穂事件」において次のように述べている。当事吉良邸を含む大名の町には辻番所があり、庶民の町には自身番屋や木戸が作られていて、午後十時になると江戸市中は自由には歩けない。そんな中をなぜ四十七人も浪人集団が徒党を組んで歩けたのか。それは！。

將軍綱吉の、赤穂藩への過酷な処分への反省、心変わりを知った、側用人柳沢吉保の計らいによるものがある。吉良上野介を本所松坂町へ追い出し、十二月十四日から十五日の未明にかけて、江戸市中の警戒は手を抜けと町奉行などに命じていたという。

ただ、童門氏はこれを裏づける資料を明示していないから、氏の推論とも思える。イヤ、童門氏の幕府援護論を証明する資料は確かにあった！「NHK 歴史への招待 第十五巻忠臣蔵」

に以下のように載っている。
元禄十五年十二月十三日付、大石内蔵助が国表へ宛てた暇乞い状の一節には――

「拙者ども罷り下り候取沙汰色々これ有り、御老中にも御存知の旨に候へども、何のございもこれなく、うち破り候迄は、格別その通に成しおかれ候事と察せられ候……」

とあり、これはやはり、最初の措置が不公平だったので、幕府は反省と後悔から浪士の行動を黙認してしまつたのではないかと、演劇評論家・作家の戸板康二氏は述べている。

忠臣蔵の最大の謎は、一般論では、なぜ浅野内匠頭は刃傷に及んだのかというものが、赤穂浪士が何の制約も咎めも受けず、本懐を遂げた裏の事情は話題にならない。

あくまでも、大石内蔵助以下四十七士の苦節と快拳のみが喧伝されている。

その方が大衆受けするのではあるが、先に紹介した内蔵助の手紙などからも、この事件に対する將軍や側近の対処の変化はもつと論じられるべきだ。それを抜きに忠臣蔵は成立しなかつたのだから。

○プロ野球と大相撲の疑惑に憤る
昨年十二月二日に、ダイエー球団のスパイ疑惑が発覚した。相手バツ

テリーのサインを解読し、打席の選手に伝えていたというものである。ダイエー球団では独自の調査を行ったが、疑惑を証明できなかったと報告した。

しかし、疑惑をただ一社詳細に報じた西日本新聞では、スパイ行為に関わったアルバイト学生から生の証言などを載せている。また、すぐに取り消した発言だが、大魔神・佐々木投手は「セ・リーグにも疑惑がある」として騒ぎを呼んだ。さらに、十二月二十日の朝日新聞は、野村克也氏が、南海の監督時代、先頭に立つてスパイ作戦の指揮をとつた、との告白を紹介している。

大相撲の八百長疑惑は、週刊ポストが連綿と報じている。実名入りの証言も度重なって食傷気味だが、他のマスコミの無関心はなぜだろう。

プロ野球と大相撲、証言はごく一部のマスコミの報道ではあるが、両者の疑惑は限りなくクロに近いと思う。パ・リーグは第三者による調査委員会を発足させたが、メンバーの一人、広岡達朗氏は「白黒をつけない」などと、不可解な発言をしている。

無垢であるべきスポーツの世界の、疑惑究明がおぼつかないことを憂えるものである。(九九・一・六)

新入会員紹介

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

歴史論文の楽しみ

木下 和司

最近、図書館で歴史論文の複写をよく依頼している。依頼するのが珍しい学術論文のためか、図書館の図書の方からインターネット上で学術図書の所蔵検索ができる文部省のホームページを教えて戴いた。会社で昼休みに読みたい論文の検索をしているが、なかなか重宝している。歴史論文を読む楽しみというものが、最近、漸く分かって来たと思う。何が面白くてこんな小難しいものを読んでいいのか自分でも不思議だった。先月、「文書様式にみる鎌倉幕府権力の展開」(近藤成一氏著)という論文を読んでいた時に、その理由が理解できた。歴史論文を読む時、著者の思考の跡を自分が理解して辿れることに面白味を感じているのだと。

自身の論理的な思考を論文として文章に表現すること、それを読んで著者の思考過程を辿れるのでは、テーマに対する理解度には雲泥の差があるのだろうが、論文の著者が創出した思考過程を追うためには読者にもそれなりのベースとなる知識が求められる。つまり、中世史に対す

る自分の基礎知識レベルが計れること、そこに面白さを感じているらしい。

一方、歴史論文を書く楽しみというのもある。こちらは、過去に他の研究者が考えつかなかった歴史的事実に関する仮説を考えつき、それが検証できた時の喜びだろう。一年間、一生懸命研究しても一件なに見つかれば恩の字。その他は、古文書と睨めつこの苦しい日々が多い。でも、それ故に喜びは大きい。今年も一つのテーマを決めたために「南北朝遺文」中国・四国編/九州編と睨めつこする、なかなか苦しい日が続いている。

中世史で特に私が興味を持っているのは、鎌倉後期から南北朝期にかけての民事訴訟制度、中世史の専門用語でいう「所務沙汰」である。なぜ興味があるのかと問われると、自分で答えに窮するが、何故か面白味を感じて研究している。強いて理由らしきものを挙げるとすれば、幕府訴訟機関を主宰した人物に興味があるからかもしれない。幕府の訴訟機関の主宰者には、武人でありながら文治を志した私好みの文人的政治家が多い(その代わり戦は弱い、例外は細川頼之くらいか)。北条泰時、金沢貞頭、足利直義、今川了俊、細

川頼之などなど。

今年、選んだ論文のテーマも、やはり「所務沙汰」に関係している。浄土寺文書に残る三通の観応二年六月廿九日付「杉原光房奉書」に関する著述である。光房奉書は、その文書形式が室町幕府の引付頭人奉書と同じであるために、かなりの中世史研究者の目を引いている。

引付は室町幕府の所務沙汰を扱う訴訟機関であり、その頭人は現代風にいえば最高裁判所大法廷の裁判長にあたる。当時は、足利一門の有力者や外様の有力守護が務めた職責であった。幕府の有力者が発給するのと同じ形式の文書を備後の一人・杉原光房が発給していることに、中世史の研究者達は強い疑問を感じているようである。これに対する答えは、「大日本史料」観応二年六月廿九日の条にみえるように、当時、中国探題であった足利直冬の意を、その侍臣・杉原光房が奉じたというのが定説となっている。しかし、私はこの定説に疑問を感じている。

「杉原光房奉書」の書き止め文言は、「依仰執達如件」(仰に依って執達件んの如し)である。「依仰」は、本来、「依仰將軍家」(將軍家仰せに依って)の將軍家が略されたものであり、この書き止め文言は室町將軍又はそ

れに準ずる人物(例えば足利直義)の意を奉じたことを示している。確かに、観応二年三月に成立した尊氏と直義の一次的和睦によって直冬は、幕府に公認された中国探題となっている。また、直冬は尊氏の実子で、且つ、直義の養子であるというその出自から將軍に準ずるものと言えるかもしれない。

しかし、観応二年(一三五二)段階では直冬の侍臣で執事的な活動をしている仁科盛宗でさえ、その発給文書に「依仰執達如件」の書き止め文言を使用していない。盛宗が、この書き止め文言を使用した奉書の発給を始めるのは、直冬が南朝に下つた正平九年(一三五四)四月からである。では、なぜ光房は観応二年にこの書き止め文言を使用した奉書を発給できたのだろうか。

一つの解答は、田辺久子氏が「室町幕府律方に関する一考察」の中で述べている。田辺氏は、光房を律方頭人(律方は禅宗・律宗関係の所務沙汰を扱う訴訟機関)としている。では、なぜ幕府の有力者でもない光房が、幕府訴訟機関の頭人になれたのだろうか。

私は、杉原氏の出自を考慮にいれて、この点を明らかにしてみたいと考えている。

紫式部に誘われて

石井しおり

弥生のひな祭りを前に、紅梅の香り漂う細道を図書館へ行く。書架を巡つてふと手にした本は、橋本治著「窈窕 源氏物語」であった。

今から千年の遠き昔、宮中に仕えた女官紫式部の著した物語をもとに出来るだけ忠実に現代語訳を試みたという。私の青春時代から何時か読みたいと密かに思っていたその最初の文字は「いつのことだったか、もうそれは忘れてしまった」という書き出しで始まる。

身はやんごとなき皇子として宮中に生まれ、三才で母を亡くし、以来父帝の傅育を受け、十二才の元服で臣籍に降下して源氏姓を賜わる。翌年、時の左大臣を父に持つ四才上上の姫と婚儀、智となって通う。権勢家の父を持つ姫と彼とはしつくり行かず次第に京の夕闇に紛れて浮名を流すことになる。お相手は姫といわず、未亡人といわず、旧斎院も、留守を守る人妻さえ訪れて門を叩く。およそ籬も柵も振り解くばかりの物語は、どんな時代背景のなかで繰り広げられたものであろうか。

紫式部が著作の頃、長徳二年（九

九六）は一条天皇の御代であった。政治は関白藤原道隆が重きをなしていた。宮中では道隆の息女中宮定子（二十一才）が花と崇められ、長子伊周（二十三才）は内大臣にと、この世を謳歌していた。それも東の関白道隆殿が俄に薨去される。今わの際に関白の位を息伊周に譲りたいと、帝に懇願されたが、それは許されなかった。

関白道隆殿には、道長と一条帝の母君である東三条院という、弟と妹がおられた。この東三条院と心を一つにする道長殿の勢力に押し切られての関白不許であった。

暗闘の勢力は次第に姿を明らかにする。道長は九才のわが姫を後宮に入れ、中宮となす。伊周は些細なこととで、それも女性問題から太宰府に流されてしまう。中宮定子は苦惱の末、父を追うが如く一児を遺してこの世を去る。二十五才であった。

かつて中宮定子の文学サロン華やかにかなりし頃、その中心に清少納言がいた。才気煥発斬新な文体をもって「枕草子」を発表した時は随分の評判で一世を風靡した。清少納言の才知は云わずもがな、時の中宮をより高く評価した世間ではあった。当時、京にあった紫式部は年若く、清少納言を羨み、中宮定子に憧れていた。

少し過ぎた二十前半のころ、式部は同族の受領、藤原宣孝と結婚する。夫は既に四十過ぎ、三人の夫人をもち、彼女と同年輩の子供達もあつた。しかしその幸せも三年余り、夫宣孝は式部に一女を遺して世を去る。

その後は、学者である実父藤原為時の保護のもとに、細々と物語を書き、つましい暮らしの中にあつた。わびしい日々の慰めに書き進める物語は、時の権勢の座から追われて行つた藤原伊周・中宮定子兄妹がモデルであり、憧れの貴公子と中宮が音もなく零落して行くさまは、天下の紅涙を絞るに十分であつたろう。

巷間の評判はついに時の権力者、藤原道長の耳に入る。わが娘を入内させて彰子中宮を擁する彼は、さらに中宮を輝かせるためのサロンの教師として、紫式部へ出仕を勧める。その折りの贈り物に運ばれたものは、漉き上げられた真新しい多量の紙であつた。「いくらでも物語を続けなさい」と。

式部は、ついに出世を決意する。職務は中宮への「記紀」の信講、日常廷内の記録と「源氏物語」の統稿であつた。宮中へあがつてしばらくの頃、中宮が父道長邸へお里下がりがあり、式部も随身して邸に下がり局を賜つた。次の日の朝まだき局か

らひとり外庭を眺めていた。白い霧がゆるゆると流れ、やがて露となつて草の上に結び、辺りが明るくなる。すると朝の渡り殿を、邸の主、道長が庭に目をやりながら、お付きの者を従えお歩きになっていた。前裁のありようを何か指図していらしやる。

爽かに明けた庭の外れのこの局に女郎花を一枝折り取らせると、衣ずれもさやかに歩んでこられた。局の戸をすつと開けられ女郎花を置かれて立つお姿は、輝くばかりに映えて式部は呆然と見つめるばかりであつた。男盛りの天下人の美しさ、それは自分の生み出した光源氏そのものであつた。贈られた花への返事として「私は美しくない女郎花、美しい朝霧は私ばかりを避けて行きます」と詠む。すると道長の返しには「つまらぬ卑下をする必要もあるまい、美しくあろうとする心こそが人を美しくする」と詠まれていた。

これは虚構ではなく、真実にあつた二人のやり取りであり、つくづく考えさせられて物思いに沈んだ。出自という家格によって定まってしまう当時の各々の身分とその一生の運命。少しばかりの才能によってはその足枷は外しようもなかった閉塞の時代に、寡婦という際を跳躍台

にして門出とし、家深く閉じ込められた女達に贈るため、癒さんがために書き続けた「源氏物語」。

平安時代の華やぎである象徴の貴公子、光源氏を女達に送り込んだ式部。そして光り輝く主人公とは裏腹な、地味で固い花芯を思わせる内気な作者の姿。

読後、私は熱い吐息とともに、夢まぼろしなれど光源氏を追慕し、さまよう。 平成十一年 桃の節句

『古事記』を読む

〈実施要項〉

日時 五月八日(土) 午後二時

会場 中央公民館会議室

座長 平田恵彦さん(歴史研副会長)

テキスト代 一〇〇〇円

(岩波文庫ワイド版『古事記』)

資料代はそのつど一〇〇円程度

『備後古城記』を読む

〈実施要項〉

日時 五月二十二日(土) 午後七時

※注意!都合で日程を変更します。

会場 中央公民館会議室

テキスト代 一〇〇〇円

(既購入者不要)

資料代 一〇〇円程度

座長 出内博都さん(城郭部会長)

菅原道真の左遷

柿本 光明

なつかしい童歌に「通りんやせ 通りんやせ ここはどここの細道じゃ 天神さまの細道じゃ ちよつと通して下しゃんせ 御用のないもの通しやせぬ この子の七つのお祝いに お札を納めに参ります 往きはよいよい帰りはこわい こわいながらも 通りんやせ」というのがある。これは「新編武蔵風土記稿」埼玉県川越城(初雁城)の条に「天神社本丸の東の方堀の外にあり三方野天神と号す(中略)いつの頃からか北野天満宮を勧請し」とある天神様である。

藤原時平は、はじめて関白になった基経の長男で、醍醐天皇のもとで菅原道真とともに大納言になり、後に左大臣となった。道真より一步先を歩いてきたが、右大臣道真が宇多上皇のお気に入りであったのが時平にとっては面白くなかった。

延喜元年(九〇一)正月二十五日菅原道真に左遷の詔勅がくだって、一週間とたたない二月一日には、都を出発することとなり、邸宅の妻戸を開き庭の梅に

「東風吹かばにほいおこせよ梅の花、 主なしとて春な忘れそ」

と別れを告げた。山城・摂津など路次の国々には、食糧や伝馬を給してはならぬという過酷な指令が出ていた。都より淀に出て道明寺の伯母覚寿尼を訪ねて暇乞いし、難波より舟行、須磨・明石と向かった。

「駅長驚くことなかれ、時の変改するを。一栄一落これ春秋」

明石の駅長との再会したときに詠んだものと思う。明石を経て淡路島の西浦に寄り、船を讃岐の沖を通るように命じた。道真四十二歳のとき、式部少輔兼文章博士の地位を解かれて讃岐守に任命されたことがあるが、これも藤原家の示威行為とみられる。こういう圧力を背景に感じながら、讃岐での任務がなつかしかったであろう。過ぎ去りし海への讃岐は、風光の美しい土地であった。

「春は客行を送り、客は春を送る。 懐を傷む四十二年の人」

と太宰府赴任の途中の作のなかの連句にある。

「福山志料」深安郡市村(現蔵王町)の条には「松下天神 松の下と云う道真左遷のとき船をここに着け「露しぐれ涙に袖はひちにけり都のことをおもい出れば」と詠み、自身松にもたれて島山を眺めたまいし図を医王寺に菅公の真筆として伝えられしが盗人により奪われ、行方しれず」

今でもこの山を天神山という。また「尾道志稿」に「菅公腰掛石 長江小麦畑という地にあり。菅公御左遷の時、御船を当浦によせられ、此石に腰かけ給いしと云」とあり、この腰掛岩から北により参道を登り隨身門(一七一六)まで来ると、継目のない五十五段横五メートルの長い石段がある。この上に立ち、目を閉じると昔この石段で神輿が怒涛の如く上下した壮観な祭絵物語が彷彿と浮かぶ。ここ尾道の御袖天満宮の由緒によると「道真がこの地によられたとき里人が麦飯と醸酒を供したところ、道真これを悦ばれ、自の衣の袖を裁つて御姿を描き与えられたという。延久年間(一〇六九〜七四)詞を建てて祀り、その後、御袖天満宮と奉称した」という。

都ではきのうまで極官の貴族として生活してきた人物も、きょうは都から追い出されて、九州の鄙へ流されていく。人の運命はわからないも

になつたとある。また、御調郡向東(現在、尾道市)古江浜地区には、「冠」「冠野」という姓が多くある。「向島史」には「延喜の昔、菅原道真太宰府貶調の砌、此地に船寄せせられ、此巖に冠を掛け四方の景色を愛でさせられし由、後にいわれの地として社を建てた」とある。

のである。

「郵亭(駅舎)余ること五十、程里三千に半 せり」

つまり千五百里、道真は都から鎮西までの行路を詩に読んでいる。

太宰府では権帥という地位であったが、この地位は名前だけで、実際には仕事はなかった。道真はいまにも倒れそうな粗末な家に閉じこもり、全然外に出なかつたという。

「瘦せては雌を失へる鶴に同じ。飢えては雛を味す鷲に類へり」

望京をうたつたそれが絶筆であった。都を出て二年、延喜三年二月二十五日享年五十九歳であった。遺言によつて太宰府に葬る。そこが後の安楽寺である。

さて、そのころの都では、道真の霊が雷神となつて清涼殿をおそい、その雷神に刀をふりかざしている左大臣藤原時平の姿が「北野神縁起絵巻」に残っている。道真の死後から六年、藤原時平は三十九歳の若さで没している。そのころから都では、道真の怨霊の祟りとささやかれた。それで宮廷では道真を本官の右大臣に復して正二位を追贈し、さらには左遷の詔を取り消している。天皇以下の畏怖ぶりがうかがわれる。こうした恐れが頂点に達し、道真の怨霊と結びつけられて天神(雷

神)の名で道真を呼ぶようになった。後に道真を祀る社殿が京都の北野(上京区)に営まれるのも、そこに平安初期以来雷公を祀る天神信仰があつたからである。

賀夜奈留美の謎

佐藤 寿夫

「記」と「紀」には登場しないが、ここに不可解な一柱の女神がいる。この神が登場するのは「出雲国造神賀詞」(注1)である。

「己命、(大穴持命)の和魂を八咫の鏡に取り託けて、倭の大物主奇甕玉命と名を称へて、大御和の神奈備に坐せ、己命の御子阿遲鋤高日子根命の御魂を、葛木の鴨の神奈備に坐せ、事代主命の御魂をうなてに坐せ、賀夜奈留美命の御魂を飛鳥の神奈備に坐せて、皇孫の命の近き守神と貢り置きて、八百丹杵築の宮に静まりましき」とある。

これによると、大物主(注2)とその子神三柱が出雲を代表する神として、大和の飛鳥・葛城・三輪などの神奈備にあつて、天皇家の守り神になるということである。

この四柱の神のうち、三柱の男神大物主命・阿遲鋤高日子根命・事代主命はそれぞれ「日本書紀」や「古

事記」で活躍し、多くの神社で祀れる有名な神だ。ところがこの中の唯一の女神、カヤナルミは、あらゆる史料から姿を消された不思議な神である。

カヤナルミは飛鳥の神奈備に祀られた「出雲の国の造の神賀詞」は証言するが、実際今日でも、奈良県高市郡明日香村大字飛鳥字神奈備の飛鳥坐神社では、事代主命と並んで飛鳥三日比命の名でカヤナルミが祀られている。

飛鳥地方の神社伝承をまとめた、「奈良県高市郡神社誌」(名著出版)には、このカヤナルミを次のように説明している。

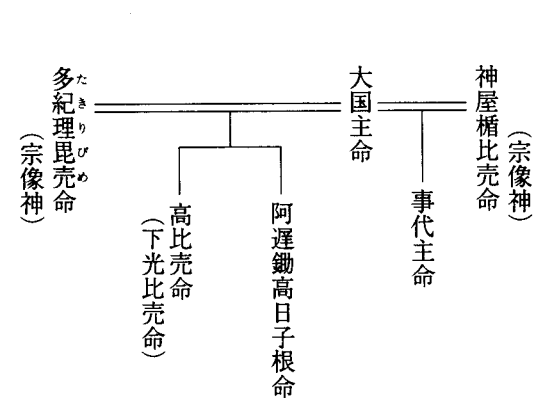
「賀夜奈留美命 賀夜は高屋にて奈留は爾坐、美は比売なり、大國主神の御女にして御母は神屋楯比売命にして事代主命の妹神に当らせ給ふ。又の名を高姫とも稚國玉姫とも称し、下照姫命並に高照光姫命と異名同体なること平田篤胤の古史伝、鈴木重胤の日本書紀伝、祝詞講義等に詳説せり」

つまりこれによれば、「賀夜」は「高屋」、「奈留」は「〜にいます」「美」は「〜姫」ということで、「賀夜奈留美」とは、「高屋にいらっしやる姫」という意味になるという。父は大國主命、母は神屋楯比売(宗

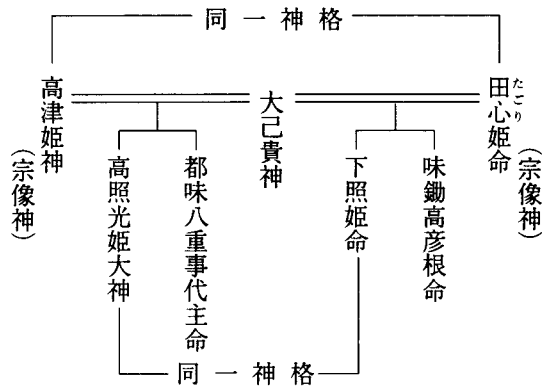
像神)、兄は事代主命がいて、高姫・稚國玉姫・下照姫・高照光姫とは異名同体だったといふのである。

これはどういうことかというところ、大國主(大物主)の娘カヤナルミの名「高屋にいらっしやる姫」が、同じく大國主から生まれた姉妹共用の名、「高い所から下を照らす」と重なること、しかもこれらの姉妹の母・宗像三神が本来一柱の神であつたことから、下照姫・高姫・高照光姫・カヤナルミといったこれまでも別神と思われてきたこの姉妹は、実際には同一の神だつたといふのである。

系図① 「古事記」による。



系図②「地神本紀」による。



この「奈良県高市郡神社誌」の「ヤナルミ・下照姫・高照光姫異名同体説は結果的に正しいと思う」
 「古事記」によるカヤナルミ関連系図①と「地神本紀」による系図②を見てみよう。
 どちらの系図にも宗像三神とカヤナルミ姫の別名の神が存在する。
 カヤナルミが本名でなく、何故、「記紀」に別名で登場するのか？
 ここに大きな謎が潜んでいると思われる。今後、飛鳥・カヤナルミ・出雲の関係を研究して行きたいと思っている。

※注1 神賀詞

出雲の国造が新任されたとき、一年の潔斎(けつさい)（神事の前に心身を清めること）を終えたのち、朝廷に向いて述べる出雲の神から天皇家に贈る祝いの言葉であった。これは外に漏れることのない宮中の秘事であったが、戦後は知られるようになった。その内容は、出雲の国譲りを受けた出雲神が、天孫族(天皇家)に二心のないこと、大和の地で天孫族の守り神になることを誓うもの。

※注2 大物主

天照国照彦天火明奇鸕速日尊のこと。「記紀」にいう大國主命とは別神で、諸伝によると別称が多くある。大物主櫛瓊玉尊・賀茂別雷大神・日本大國魂大神・事解之男尊・大歳御祖大神・天火明尊・布留御魂・大歳尊・饒速日尊・三輪大神など。

短歌二首

詠み人 藤代 由子

空高く山城見えて

つわもの息吹聞こえる

松の風音

名も高き城の中なる静けさは

柱に残る切り傷の跡

私のこの一冊 遵行使節 沙弥

「鎌倉幕府訴訟制度の研究」

佐藤進一 著

この本ははくの中世史研究の座右の書です。中世法制史に興味のある方には必読の書です。巻末の「鎌倉幕府職員表復原の試み」は、弘安年間以降の幕府職員を調べるのに便利です。

備後関係では、杉原氏惣領家の祖・光平のひ孫で、南北朝期に幕府奉行人として活躍した光房の祖父にあたる親綱が載っています。ほくが杉原氏幕府奉行人説に確証を持ったのは、この本がきっかけです。

会報八九号の原稿募集

原稿締切 五月二二日(土・必着)

原稿は一号につき一人一本に限り(厳守)。本文「一行一六字×二〇行」でちょうど一ページです。以下三二行毎に一ページの一段になります。四〇〇字詰原稿用紙を使用する場合は、下四字分を空白にして、一行一六字にして書いて下さい。皆様の力作を期待しております。今回は予算都合上一ページ半以内でお願いします(依頼原稿例外)。

第五回郷土史講座

戦国水野氏の興亡

水野氏歴代の生き様をたどり
 勝成の福山築城の意味を問う

われわれは水野氏という、勝成を思い出す。福山の町は勝成の福山築城とともに始まったのだからそれも当然であろう。だが、「なぜ勝成は備後十萬石の大名となれたのか」という「問いかけ」に対しては、満足な答は返ってこないようである。

「水野家は譜代大名であり、勝成は家康の従兄弟であった」なるほどそうであろう。その答に間違いはない。しかし、一歩水野氏の歴史に踏み込むと、疑問が続出する。

たとえば、こんな事実がある。
 「慶長五年の関ヶ原合戦まで、大名としての水野家は家康から領地をもらったことがない……」

今回は今ままであまり取り上げられなかった勝成以前の水野氏の歴史を探り、改めて勝成の福山築城の意味を調べてみたい。(田口記)

《実施要項》

日時 五月二九日(土)午後二時

会場 福山市民会館会議室

★中央公民館ではありません!

講師 田口義之会長

資料代 一〇〇円程度

【特別歴史講演会】

黒塚古墳と三角縁神獣鏡

主催 関西大学備後支部
後援 備陽史探訪の会
広島県立歴史博物館
福山市教育委員会

関西大学備後支部は今年創立六十周年を迎えます。これを記念してこの六月に特別歴史講演会を開催することになりました。

これについて同支部長の赤松治美さんから、われわれの会に後援依頼がありました。検討の結果、会として全面支援をすることにしました。講演の内容が素晴らしく、会の活動目標とも一致するためです。

後援する以上は全面支援をしたいと思えます。とくに動員面では会場を備陽史探訪の会の会員だらけにする決意しておりますので、友人知人お誘い合わせの上ぜひご参加下さい。会員の皆様のご協力をお願いいたします（この決定は、会則第五五条、補足事項によるものです）。

《実施要項》

日程 六月二日（土）
時間 午後二時開演（四時終了）
会場 広島県立歴史博物館講堂
会費 無料
講師 河上邦彦先生

【講師紹介】

講師の河上邦彦先生は昭和二〇年生まれ。もちろん関西大学のOBで、文学博士。現在、檀原考古学研究所の調査研究部長をなさっています。昨年、話題を独占した黒塚古墳の発掘責任者として大活躍されました。

また、平成五年から大和古墳群の前期古墳、中山大塚・下池山両古墳の学術調査も担当、初期ヤマト王権の実相を明らかにされつつあります。著書としては「後・終末期古墳の研究」などがあります。

【講演内容の概略】

天理市の黒塚古墳の調査したところ三十三面もの三角縁神獣鏡が出土しました。従来この鏡は、魏から卑弥呼に与えられたもので、それが伝世されてヤマト王権の権威の象徴となり、各地の豪族に服属の証として配布されたと考えられていました。

しかし、三角縁神獣鏡の副葬状態を見ると、この鏡は遺体を邪霊から守る呪物であったと考えられます。似たものとして中国に面罩があり、三角縁神獣鏡はこの代用品だったと思われれます。つまり、この鏡はヤマト王権が製作し、大王が服属者の死にあたり葬具として配布したものであつて、決して「卑弥呼の鏡」などではありません。

事務局日誌

二月一三日（土）

「古事記」を読む。参加一九名。

二月二〇日（土）

「備後古城記」を読む。参加一七名。

二月二一日（日）

「小早川氏の名城、高山城に登る」参加八三名。講師田口会長。地元

の寶龜さん大活躍。

二月二七日（土）

▼午後二時から郷土史講座「備後杉原氏の出自について」参加三四名。講師は木下和司さん。於福山市民図書館集會室。

▼午後七時から「掛迫第六号古墳報告書」検討会。於「ホーセン」。

参加七名。

二月二八日（日）

城郭部会測量調査。福山市熊野町の「中山田山城」参加二二名（会員一四名、地元七名）。地元の方々に樹木の伐採をお手伝いいただき大感謝。

三月二日（日）

役員会。主な議題は「親と子の古墳めぐり」について。参加一二名。

三月一三日（土）

「古事記」を読む。参加一八名。

三月一四日（日）

バス例会「日本一の備中松山城に登る」。講師は出内さん・坂本さん。参加は五四名。慰労会参加者も約三十名で大盛況。

三月二〇日（土）

「備後古城記」を読む。参加一五名。

三月二一日（日）

中山田山城の測量調査。小雨の降る中、根性の測量。さすが城郭部会でした。参加九名。

三月二二日（月・祝）

午後七時から「掛迫第六号古墳報告書」検討会。参加六名。

三月二七日（土）

郷土史講座「三角縁神獣鏡と古墳」講師は網本善光さん。参加三九名。

三月二八日（日）

「青春きつぷ神戸・西宮の旅」参加三九名。初めての試みでどうなることかと心配だったが、ほとんどトラブルなしで大成功。

四月二日（金）

旅行委員会。一泊旅行の日程・旅程を検討する。出席四名。

四月四日（日）

城郭部会有志が来年度バス例会の候補地（西城町大富山城跡等）検討のために山城探訪。参加八名。
四月一〇日（土）
「古事記」を読む。参加一七名。
★とくに断わりのない場合、会場はすべて中央公民館です。

歴史研オリジナル徒歩企画

南北朝の争乱の跡を訪ねて

—歴史研は井原線の味方です—
大成功に終わった「青春18きっぷ」の旅に続いて歴史研のオリジナル企画第二弾です。

五月一六日、会として初めて井原線を利用し、歴史ウォークを実施します。まだ井原線に乗ったことのない人にはとくにお勧めのコースですが、乗ったことのある人も十分満足できます。歴史研はこれからも引き続き井原線を応援していきます。

《主な探訪予定地》

★**軽部神社**（清音村下軽部）
建武元年（二二三四）、福山城主大江田（大井田とも）氏が紀伊国熊野から速玉男命・事解男命・伊弉諾尊の三神を勧請して軽部山の嶺に社殿を建立し、祈願所としました。建武三年（二二三六）の福山城合戦のとき社殿が焼失しましたが、天正四年（一五七六）、毛利輝元が社殿を再興して「五社王子権現」と改称しました。

延宝六年（一六七八）現在地に移転、明治二年（一八六九）「軽部神社」と社号を改め今日にいたっています。

★**大覚寺**（清音村軽部）
日蓮の高弟日像の弟子、大覚大僧正（妙実とも）によって康永元年（一

三四二）に開かれた日蓮宗の寺です。大覚は後醍醐天皇の皇子とも近衛関白藤原経忠の子とも伝わっています。南北朝争乱の忠魂を弔い、石塔を建しました。大理石の題目塔には「南無妙法蓮華経」と刻まれています。

★**備中福山城**（山手村福山）
国の史跡です。建武三年、足利尊氏が九州から攻め上ってきたとき、新田義貞の武将、大江田氏経が足利尊氏の弟、直義を迎え撃った城です。標高三〇二m、往古は百射山と呼ばれ、山岳仏教が栄えました。報恩大師が福山寺はか一二坊を建て、伽藍が全山に及んだので「福山」と呼ばれるようになりました。

★**安養寺**（倉敷市浅原）
報恩大師開山の真言宗の古刹。浅原千坊の中院として存在しました。本尊は重要文化財の毘沙門天像。県史跡の安養寺裏山経塚群があります。平安末期に流行した末法思想により、經典を後世に残そうと経文を地下に埋納する風習が生まれました。なお、鹿ヶ谷事件で備前国に流された藤原成親が出家したのが安養寺だと「源平盛衰記」に記載があります。

★**実施要項**
日程 五月一六日（日）
★雨天の場合、五月二三日（日）に順延。二三日が雨の場合は中止。

集合時刻 午前七時四〇分（厳守）
集合場所 福山駅南口（釣人像前）
★福山発「午前八時七分」に乗車。
（神辺経由井原線で清音駅まで直通）
神辺発「八時二二分」
清音着「九時二二分」

★現地集合者はJR・井原線「清音駅」前へ午前九時二五分までに。
★交通費は各自負担（以下は参考）。
JR線「福山・神辺間」二〇〇円
井原線「神辺・清音間」九八〇円
バス線「浅原・倉敷間」二六〇円
（この間を歩くと一時間弱）
JR線「倉敷・福山間」七四〇円
申込受付 四月二一日（水）から
午後八時〜一〇時（平日のみ）
平田歴史研副部会長宅へ
（〇八四九一二三三七七八二）
講師 種本実さん（参与）
募集数 八〇名
参加費 会員 五〇〇円
一般 六〇〇円

（傷害保険料・資料代込み）
その他 弁当・飲物持参。歩きやすい服装・靴でご参加下さい。
約五・五九・五kmのコースです。清音駅↓（〇・五km）軽部神社↓（〇・七km）大覚寺↓（一・八km）↓浅原古戦場（峠）↓（一km）備中福山城↓（一・五km）安養寺↓四km、バス又は徒歩倉敷駅。登山があるので比較的健脚の方向きです。

一泊旅行の日程変更

今年秋の一泊旅行「豊穰の大地、播州平野をゆく」は当初十月一六日、一七日に実施する予定でしたが、宿舍の改装工事のため一週間繰り下げ、十月二三日、二四日（土日）に実施することになりました（完成直後の真新しい部屋に泊まることができます）。探訪地は兵庫県加西市・小野市・社町・加古川市を中心とした地域で、兵庫県の国宝寺院のほとんどを探訪します。詳細は六月発行の会報八九号でお知らせします。

《主な探訪予定地》

- ★一乗寺（加西市坂本町）
- ◆古法華石造如来像（同市西長町）
- ◆北条の五百羅漢（同市北条町）
- ◆酒見寺と鴨住吉神社（同市北条町）
- ☆玉丘古墳（同市玉丘）
- ◇山伏峠の石棺仏（同市玉丘）
- ★浄土寺（小野市浄谷）
- ☆広渡庵寺跡（同市浄谷）
- ★朝光寺（河東郡社町畑）
- ★鶴林寺（加古川市北在家）
- ◆尾上神社（同市尾上町長田）
- ・中道子山城跡（同市志方町広尾）
- ☆西条古墳群（同市神野町）
- ☆大中遺跡（加古郡播磨町大中）
- ★は国宝 ☆は国史跡
- ◆は国重文 ◇は県重文

第七回親と子の古墳めぐり

主催 備陽史探訪の会
後援 神辺町教育委員会
福山市教育委員会

毎年恒例の「親と子の古墳めぐり」も今年第一七回を迎えることができました。ここまで回を重ねてこられたのもひとえに会員の皆様のご協力の賜物です。

とくに昨年は約一六〇名もの参加を得ることができ、近年の低迷を脱することができました。今年も昨年以上に参加者を集めることのできるよう、会員の皆様のよりいっそうのお力添えをお願いいたします。

親と子の古墳めぐりの意義は「親と子で古墳を見学することや遺跡にふれあうことにより歴史を学ぶことの楽しさやおもしろさを体験してもらい、あらためて歴史学習とともにこれら文化財の大切さを認識してもらおう。あわせて、親と子のふれあうひとときの楽しさを味わってもらおう」

ということですが、あまり気負わず、気楽に神辺を散策するつもりで参加ください。その際には、お子さん、お孫さん、お友達、お知り合いの方などをお誘いいただければと思います。

【実施要項】

〔日程・集合時刻〕

五月五日（祝）午前八時二〇分
（時間厳守・小雨なら決行します）

〔集合場所〕

福山駅南口「釣人の像」前

〔参加費〕（資料代、保険料込）

大人六〇〇円

子供四〇〇円

ただし交通費は各自の負担です。

〔募集人員〕二〇〇名

〔申込方法〕往復はがきに参加希望者名と各自の年齢、住所、電話番号、参加者同士の関係（小学生は学年も）を明記の上、四月三〇日（金）までに事務局へ必ず申し込んで下さい（飛び入りは困ります）。

〔見学場所〕

深安郡神辺町御領から湯野周辺で古墳および寺跡を見学します。

コースは「法童寺古墳―備後国分寺跡―国分寺裏山古墳群―表山古墳群―迫山古墳群」です。

〔参加資格〕

とくにありません。大人だけでも参加できます。ただし、小学校六年生以下の児童は保護者の付き添いが必要とします。また、五km〜六km歩きます。

〔その他〕

①弁当・飲み物は各自持参。

②服装と靴は山歩きの出来るものを着用して下さい。

③井笠バス「井原行」八時五〇分発に乗車。「下御領」下車。
（大人運賃四五〇円）

④午後三時三〇分ころ現地解散。

第四回郷土史講座

謎の武将毛利元康の実像に迫る

毛利元康について事典を調べると、おおよそ次のようであるだけで、あまり詳しい記述はありません。
永祿三年（一五六〇）慶長六年（一六〇二）元就の八男。母は三吉氏。出雲末次城主として末次氏を称していたが、天正一三年（一五八五）同母兄の毛利元秋の死によって同家を相続し、月山富田城主となった。慶長五年（一五〇〇）の関ヶ原の戦いの後、長門厚狭郡の一万五百石に移封されたが、同六年一月十三日、大坂で病死。

しかし、元康の事蹟は他にも、関ヶ原の戦いで京極高次の守る大津城を一万五千で攻めてこれを落としたこと、朝鮮侵略では吉川広家とともに輝元の名代として出陣し、碧蹄館の戦いで大活躍して秀吉から感状を受けたこと―そして意外にも、元康が天正一九年（一五九一）から慶長五年までの間、神辺城と深津城の城主

であったこと、家臣の井上新左衛門が明王院の瓦の葺き替え工事を行ったことなどがあげられます。

実は、元康は備南で活躍した武将の中で最も記録が残っている人物なのです。この記録は「厚狭毛利家文書」といいますが、「萩藩閥閥録」等に掲載されていないので一般にはほとんど知られていません。この記録の中には、秀吉の感状九通をはじめ、毛利輝元・吉川元春の感状、石田三成・大谷吉継・立花宗茂ほか多くの戦国大名からの書状等が含まれています。

小林さんは山口県の山陽町立図書館に何度も通ってこの古文書を写真撮影され、時間をかけて解読されました。講座では、元康についての新しい情報を余すことなくお話しいただきます。ぜひご参加下さい。

小林さんは山口県の山陽町立図書館に何度も通ってこの古文書を写真撮影され、時間をかけて解読されました。講座では、元康についての新しい情報を余すことなくお話しいただきます。ぜひご参加下さい。

小林さんは山口県の山陽町立図書館に何度も通ってこの古文書を写真撮影され、時間をかけて解読されました。講座では、元康についての新しい情報を余すことなくお話しいただきます。ぜひご参加下さい。

小林さんは山口県の山陽町立図書館に何度も通ってこの古文書を写真撮影され、時間をかけて解読されました。講座では、元康についての新しい情報を余すことなくお話しいただきます。ぜひご参加下さい。

小林さんは山口県の山陽町立図書館に何度も通ってこの古文書を写真撮影され、時間をかけて解読されました。講座では、元康についての新しい情報を余すことなくお話しいただきます。ぜひご参加下さい。

小林さんは山口県の山陽町立図書館に何度も通ってこの古文書を写真撮影され、時間をかけて解読されました。講座では、元康についての新しい情報を余すことなくお話しいただきます。ぜひご参加下さい。

小林さんは山口県の山陽町立図書館に何度も通ってこの古文書を写真撮影され、時間をかけて解読されました。講座では、元康についての新しい情報を余すことなくお話しいただきます。ぜひご参加下さい。

小林さんは山口県の山陽町立図書館に何度も通ってこの古文書を写真撮影され、時間をかけて解読されました。講座では、元康についての新しい情報を余すことなくお話しいただきます。ぜひご参加下さい。

小林さんは山口県の山陽町立図書館に何度も通ってこの古文書を写真撮影され、時間をかけて解読されました。講座では、元康についての新しい情報を余すことなくお話しいただきます。ぜひご参加下さい。

小林さんは山口県の山陽町立図書館に何度も通ってこの古文書を写真撮影され、時間をかけて解読されました。講座では、元康についての新しい情報を余すことなくお話しいただきます。ぜひご参加下さい。

小林さんは山口県の山陽町立図書館に何度も通ってこの古文書を写真撮影され、時間をかけて解読されました。講座では、元康についての新しい情報を余すことなくお話しいただきます。ぜひご参加下さい。

小林さんは山口県の山陽町立図書館に何度も通ってこの古文書を写真撮影され、時間をかけて解読されました。講座では、元康についての新しい情報を余すことなくお話しいただきます。ぜひご参加下さい。

小林さんは山口県の山陽町立図書館に何度も通ってこの古文書を写真撮影され、時間をかけて解読されました。講座では、元康についての新しい情報を余すことなくお話しいただきます。ぜひご参加下さい。

小林さんは山口県の山陽町立図書館に何度も通ってこの古文書を写真撮影され、時間をかけて解読されました。講座では、元康についての新しい情報を余すことなくお話しいただきます。ぜひご参加下さい。

六月度バス例会 賀茂台地に中世武士の 面影を訪ねる

平賀氏と新庄小早川氏の史跡

六月度のバス例会は「しまなみ海道を越えてー今治・東予の旅ー」の予定でしたが、開通直後のしまなみ海道は混雑が予想されるため予定を変更して、賀茂台地に安芸の国人領主である平賀氏と新庄小早川氏の史跡を訪ねます。

平賀氏は、鎌倉時代末期に出羽国から安芸国賀茂郡高屋保に西遷してきた地頭です。平賀氏の西遷時期は「平賀家文書」に残る建武三年十一月の「足利直義御教書」より考えて南北朝初期と考えられ、その居城は県史跡として有名な御園宇(みそのう)城です。

また、新庄小早川氏は椋梨氏を称した沼田小早川氏の庶家であり、椋梨川流域に自立して多くの庶子を出した一族です。その居城は椋梨川流域の交通の要所にあり、堀城と呼ばれています。椋梨氏は、代々、新庄方の庶子家を率いて合戦に参加し、小早川一族のなかでも沼田・竹原両小早川に次いで重きをなした一族です。

今回のバス例会は田口会長と木下さんのご案内で、この二つの一族の本拠地を訪れます。

《募集要項》

※講師 田口義之さん
木下和司さん

※日程 六月六日(日)

※集合時刻 午前八時(一〇分出發)

※集合場所 福山駅北口

(福山キヤッスルホテル前)

※会費 会員 三七〇〇円
一般 四二〇〇円

(資料代・木原家住宅入場料・保険料を含みます)

※受付開始日

四月二一日(水) 午前九時から。

事務局に電話でお申込み下さい。

※募集数 四三名(先着順)

※その他

弁当・飲物はご持参下さい。歩きやすい服装・靴でご参加下さい。
なお、キャンセルは六月五日(土)までにお願います。

《主な探訪予定地》

▼木原家住宅(重要文化財)

東広島島の東部丘陵にある高屋町一帯は、かつては竹原へ抜ける街道筋にあたり、牛市や往環の旅人で股賑を極めていた。木原家はこの地の旧家で、酒造業を営み、三原の塩田開発を行った豪商であった。

木原家住宅は近世初期の町屋形式を残す民家で、国の重要文化財に指定されている。また、木原氏は平賀氏の同族で、木原城によって木原氏を名乗った一族の末裔である。

▼御園宇城(県史跡)

高屋堀の東北の谷奥近くに位置する土居形式の城跡である。城主は平賀氏である。

比高二〇メートル足らずの丘陵上にあり、中央に六〇メートル×五五メートルの最大の曲輪を置き、その南に二段、東と西に土塁状の曲輪、北に詰の丸にあたる曲輪をそれぞれに配する。築城時期は明確ではないが、鎌倉時代末期と思われる。

▼堀城(椋梨城)

椋梨川南岸の山麓にある丘陵を中心に構築された椋梨氏の居城で、椋梨国平以来、約三百年間、椋梨氏の根拠地であった。桜ヶ城・椋梨城とも称する。前方に空堀があり、その全面一帯に市頭・市尻という地名や胡社がみられることから市場が開かれていたことが知れる。

▼黒谷墓坪第一号古墳

沼田川の上流、大和町下草井黒谷にある径九メートルの円墳と思われる。横穴式石室の奥が二段になり、全国で唯一の箱形の棚式副室を持つ古墳として有名である。

備陽史探訪号外 岡崎地方史研究会との 姉妹提携決定!

このたび備陽史探訪の会は、福山市の姉妹都市、愛知県岡崎市の郷土史研究団体である「岡崎地方史研究会」との姉妹提携を結びました。

今後、相互の地域研究などさまざまな交流を通じて友好関係を深めていこうと考えています。当面は「備陽史探訪」「山城志」等の会報・機関誌の交換による交流を行います。

すでに岡崎郷土史研究会からも事務局に同様のものが送られてきます。ご覧になりたい方は事務局までご連絡下さい(この決定は、会則第五條、補足事項によるものです)。

《編集後記》

個人的なことですが、四月に仕事の内容が大幅に変わり、四十前の学習状態になっていきます。今年、どうしても書こうと思っています。手付かず状態です。今回の会報編集も半分以上、磐座亭主人さんに手伝っていただきました。感謝しています。

(遵行使節 沙弥)

備陽史探訪の会事務局 ☎0849-531-1116

福山市多治米町五一一九一八

☎0849(五三)六一五七